特集：福祉国家の多様性：比較福祉レジーム論の射程

趣　旨

1990年に出版されたエスピン＝アンデルセンのThe Three World of Welfare Capitalismは、現在に至るまで福祉国家研究の根幹をなすと言ってよい。福祉国家を区別する基準を、給付のあり方（所得比例を加味した均一給付か貧困層などへの対象限定給付か）、市場との関係（労働の脱商品化の度合）、福祉国家を支える社会集団の連合の有無の3基準で区別し、制度・市場・社会を横断する視点を初めて提供した。それに加え、支持勢力の政治的形成と福祉国家の歴史的形成を関係づけて、社会民主主義・保守主義・自由主義レジームを区別する類型論は、3つの世界と呼ぶにふさわしい包括的なものである。資本主義化と同時進行した西欧の民主化の歴史は福祉国家形成の歴史に連なる。しかしながら、西欧の事例と緊密に結びついた分析枠組は、後に福祉国家化を進めた新興国や旧社会主義国の分析には当然のことながら齟齬を来す。新しい福祉国家への応用の可能性と限界を通じて、エスピン＝アンデルセンの福祉レジーム論は、福祉国家の実証研究の展開と福祉レジーム論の発展に貢献することとなった。本特集の論文は、先進国から新興国へ歴史を横断する比較福祉レジーム論による研究の成果である。

韓国を取り上げた金論文は、新興国の福祉国家分析におけるエスピン＝アンデルセンのレジーム論の限界に焦点をあて、そこから新しい分析視角を提案する。具体的には、類型を作ることで一般化を図ったエスピン＝アンデルセンに対し、新興国が先進諸国より後に福祉国家を形成した「後発」に焦点をあて、歴史的発展段階の相違から比較分析を行なう。20世紀前半から後半にかけ福祉国家を形成し黄金期を経験した先進国と、福祉の縮小や抑制が常態となった20世紀末に福祉国家化に乗り出した韓国の対比である。失業・貧困の古い社会的リスクから少子高齢化の新しいリスクへの対応を迫られつつ、社会保障の導入と同時にその抑制を迫られた韓国は、リスクへの対応に関しては社会民主主義レジームの特徴を、抑制の制約においては自由主義・保守主義レジームの特徴を持つに至った。実証分析に基づき、社会民主主義・保守主義・自由主義の政治勢力の相違でなく、後発という段階の制約が福祉国家を特徴付けた点を重視し、類型論と段階論の融合したアプローチの重要性を指摘する。

柳原論文は、旧社会主義圏のハンガリーの事例を取り上げ、社会主義体制時代の、労働の脱商品化の度合が低い擬似的普遍主義システムと対外債務の蓄積が、市場経済化後の福祉国家の出発点であるとする。社会主義体制崩壊後の過渡期を経ても、エスピン＝アンデルセンの類型には収斂せず、また中東欧諸国の間にも多様性が残存する。旧社会主義圏では、ハンガリーは改革の成功例と考えられ、財政赤字と戦いながらも年金・雇用・家族政策で制度を整えつつある。韓国と同様、その制度には自由主義レ

ジームや保守主義レジームの混合の特徴が見られる。他方、中道右派の安定政権の成立が福祉国家の形成を左右する可能性を指摘し、エスピン＝アンデルセンのレジーム論とは異なる形での政治勢力の重要性を主張する。

畑論文は、近年、自由民主主義と資本主義の要件を満たすようになったメキシコの福祉国家をとりあげる。社会福祉制度の形成は多元性を欠く文民統治が行なわれていた1940年代にさかのぼり、その体制は社会的地位によって分断された制度を持つ点では保守主義レジームであるが、公的サービスが少ない点では家族主義とも位置づけられるとする。1990年代以降、現金給付や非拠出の社会扶助プログラムが人口の1割以上を占める貧困層に対して行なわれ、2000年代以降には医療や保健のサービスが拡充された。パターナリズムやクライエンティリズムの強い影響の下でも、社会権・人権の法的保障が、社会保障制度に包摂される集団とされない集団の二重構造を変えていく可能性に言及している。

タイについての河森論文は、福祉国家形成及び経済成長と高齢化の関係の相違に焦点をあて、新興国の福祉国家間の多様性に着目する。日本よりタイミングは遅れるものの、韓国・シンガポールでは経済が成長し一人当たりGDPが十分高くなった後、高齢化を迎える。こうした東アジア先進国に対し、東南アジア諸国では豊かさも十分達成できず農業人口が多く残った段階で、普遍的医療と介護の両者への対応が必要になる。こうした東南アジアの福祉国家の現状をタイの事例で分析する。短期間に同時に対応を迫られる不利な条件の下、政府は、医療分野においては主導権を持つ一方、家族やコミュニティが中心的役割を果たす福祉政策や年金政策では調整の役割に徹している。東南アジアの福祉国家においては、政府は担い手というよりは調整者であり、その調整機能に着目することで、先進諸国や東アジア先進国との比較が可能になると結ばれている。

エスピン＝アンデルセンによる先進諸国の事例に基づいた類型論から新興国の福祉国家分析は出発し、現在は、新興国内の多様性にまで分析が及んでいる。東アジア、東南アジア、ラテンアメリカ、中東欧という地域の代表的事例を題材に、本特集は、先進諸国から新興国まで、歴史を横断する新たな比較の視座を提供する。

（加藤淳子　東京大学大学院教授）